

## 【書評】

チェル・ノールストッケ著（橋本昭夫訳）

### 人間、このかけがえのないもの —ディアコニアの基礎と実践—

（B 6判 141頁 1260円 いのちのことば社 2004年）

佐柳 文男

聖隷クリストファー大学

Kjell Nordstokke, *Det Dyrebare Mennesket*,  
(*Ningen, Kono Kagegai no nai Mono—Diakonia no Kiso to Jissen*,  
tr.by Akio Hashimoto)

Fumio SAYANGI

Seirei Christopher College

本書では「社会福祉」なる言葉は一度も用いられない。しかし本書が扱うテーマはキリスト教社会福祉の理念である。あるいは社会福祉のキリスト教的理念と言っても良い。「訳者のあとがき」によれば、著者チェル・ノールストックは神学者で、ノルウェー福祉大学の学長の職にあると言う。ノルウェー伝道会の宣教師としてブラジルに派遣されたほか、(序文によれば、10頁)南アフリカで働いた経験ももっておられるという。社会福祉はキリスト教あるいは聖書と深いつながりがある。しかし両者の関係を明らかにするのは非常に難しい。著者はこれら二つの領域に専門的にかかわっておられるので、キリスト教社会福祉の理念を論じるには適任であると言わなければならない。

著者は「日本語版への序言」で、「本書はノルウェーの事情を反映している」から「日本の読者が本書からどのような益をうける」か分からないと言う(5頁)。たしかにノルウェーの教会と日本の教会とは、社会福祉に対する取り組み方において非常に違っている。著者の属するノルウェー国教会は『ノルウェー国教会におけるディアコニア計画』(30頁、他)を持ち、「個々の教会におけるディアコニアの働きが順調に発展している」(78頁)という。翻って、日本の教会はどうであろうか。日本の教会が社会福祉について深い理解を持ったことはほとんどない。しかし日本のキリスト者は社会福祉の各方面で先駆的働きをしてきた。キリスト者は日本社会において絶対的少数派であったのに、日本の社会福祉の先駆けとなり、注目すべき足跡を残している。しかし、今日、日本のキリスト教社会福祉が危機的状況にあることは多くの論者が指摘するところである。

日本とノルウェーでは、教会の置かれた状況がまったく異なっているにも関わらず、日本の教

会が本書から多くを学ぶことができる。とくに社会福祉とのかかわりについて、多くを学ぶべきであると思う。本書によれば、ルーテル教会の伝統において、信仰について語る事が極度に重視され、愛のわざについて語る事が躊躇されてきたという(9頁、53頁)。それはルターの二王国論に従って、「ディアコニアのほとんどが教會的空間から切り離され、世俗の空間に置かれるようになった」ためであるとされる(53頁)。教会は「宣教」に専念すべきであるとし、ディアコニアのわざも宣教に従属する活動としてしか考えないことになった(107頁)。しかし「いまの時代、宗教改革期のように、教会と社会が一つであると考えことは不可能である。ルターの二王国論の延長線上で、今日の世俗化された政治制度が教会のディアコニア的責任を担うことができると考えるのは、極めて困難である」(54頁)とされる。その結果、著者は教会が「今の時代が投げかけている課題に充分に対応してこなかったのではないか」との印象を持っているという(134頁)。著者が福祉大学学長として感じていることは、日本のキリスト教社会福祉関係者が感じている危機感とそう遠くないのではないかと思われる。本書は社会福祉(ディアコニア)の働きに具体的に關ろうとする人々に励ましを与えるために書かれた(10頁)。危機的状況に陥っている日本のキリスト教社会福祉の現場で多くの人々が労苦している。彼らは本書によって励ましを受けることができると思う。

本書は序言に続いて、二つの部分からなる。第一の部分ではディアコニアの聖書的、神学的理念が取り上げられる。ディアコニアとは何であるか、その内的本質が論じられる。第二の部分では、「ディアコニアをどう具体化するか、どのように組み立てられ、そのしるしはどのよ

うなものであるかがテーマとなる」(68頁)。つまり第一の部分で明らかにされたディアコニアを支える教会の機構、姿勢などが論じられる。

第一の部分の冒頭で「キリスト者とは何か、何をするか」が問われる(14頁)。著者の結論は「キリスト者とはディーコン・ディーコネスであり、仕える者である」ということになる。「洗礼が万民祭司職への任職である」と一般に言われるのと同じように、同時にまた万民『奉仕(ディアコニア)職』への任職と言うことができよう」とある(35頁)。さらに教会とは何かという問いにも同じように答えられる。「ディアコニアは教会の本質の基本部分を構成する」とされる(30頁)。「ディアコニアとしての教会」という表現も用いられる(41～55頁)。「ディアコニアの次元を捨象した教会理解は、決して思われているほどルーテル教会的ではない」とも言われる(45頁)。さらにはまたイエス・キリストが「ディーコンの原型」とされる(56～66頁)。このような理解から、「ディアコニアは、一般的な意味での倫理的義務ではなく、新しいいのちに生かされている共同体に属するものという事実根拠を持つ営み」であるとされる(25頁)。それぞれの主張について、聖書から豊富な引証がなされる。ここだけでなく、本書の全編にわたって、聖書から堅固な引証がなされている。そのために本書が聖書的社会福祉論としての強い説得力を持つことになっている。

以上のように、キリスト者、教会、イエス・キリストが「仕える者」をキー・ワードとして捉えられる。

そこで次に、仕えられるのは誰か。「ディアコニアを理解する上での重要点は、苦しみの中にある人は助けられねばならないということである」(33頁)。それは「神の眼には、一人ひとりそれぞれ高価で尊い」という人間理解がある

からである(8頁)。ノルウェー教会の公式の理解によれば、「ディアコニアとは、教会が行う隣人への配慮であり、共同体を建て上げる働きであって、その奉仕は困窮の中にある人々のために特別の方法でなされる」と言う(30頁)。この定義の中にある「困窮の中にある人々」すべてが「神の眼には高価で尊い」存在であり、隣人によって「仕えられる」べき対象である。「すべての人に、人としての尊厳を保ち、意味豊かな人生を生きるために必要なものを提供することである。人間の生のどの側面もディアコニアの課題であり、その働きの対象である」(32頁)。

では「困窮の中にいる人々」はどこにいるのか。著者は「ディアコニア」を、教会的ディアコニア、施設のディアコニア、国際的ディアコニアの三つの形態に分類する(36頁、68～82頁)。それによって「困窮の中にある人々」のいる場が網羅される。そして、「ディアコニア的実践の主軸」となるのは「困窮の中にある人々」への「訪問」と「もてなし」である(96～105頁)。これら二種類の働きを、教会的ディアコニアにおいては、一般的に教会と教会員が行う。これは「一般的ディアコニア」と呼ばれる。その目的は主として「予防的性格のもの」である(30頁)。しかし専門職と専門的施設によらないと対応できないケースがある。そのために施設のディアコニアがあり、そこでは専門的訓練を受けた「専門的ディアコニア」による対応がなされる(79頁)。さらに「諸国間の貧富の差がますます広がっていく今の時代にあっては、国際的なディアコニアがだんだん重要な課題となってきた」と言う(31頁)。

さらに二つの重要な点が挙げられる。第一に、そのような助けは「単発的な行為」であってはならないということである(33頁)。第二に、

「助ける側がいつも助ける側であり、助けられる側がいつも助けられるだけの立場であると理解されてはならない」(同)。「助けを受ける状況にある人」も「助ける側に回る」可能性があるのだから、その用意をさせると同時に、助ける者も助けられる側に回る用意がなければならない(同)。

日本の教会が本書からとくに学ばなければならない点はディアコニアを「教会の働き」、「教会の本質の基本的部分」、「共同体を建て上げるための働き」としている点である。「教会はディアコニアを通して愛を見える形にする」(8頁)。そのために「ディーコン・ディーコネス」の職位が置かれる。しかしほとんどの教会において「ディーコン」の役割は「牧師から派生する」もの、「ミニ牧師」(93頁)とされている。それに対し、著者は「教会はその本質からしてディアコニア的である」という理解に立って、「ディーコン」の役割を考える(89頁)。教会の職務は「説教をし礼典を執行することのみに限定する」のは誤りである(91頁)。そこではディアコニアの目的も福音宣教であるとされ、「ディアコニアは教会の働きの付随的な一部」とされてしまう(107頁)。新約聖書はディーコンが負うべき特別の責任が何であるかについて語らない。「強く求められているのは非難のない生活を通して示されるリーダーとしての人格的資質である」(89頁)。「教会の職務はただ狭い意味での信仰のためにのみある」のではない。ことばによる宣教だけでなく、「愛の奉仕」による宣教をも含む(92頁)。しかし「教会の職務は一つであり、この一つの職務のうちに多くの形の奉仕がある」(93頁)。「ディアコニア」と「福音宣教」とは対立するものではない(106頁)。「ディアコニアは教会のボディー・ランゲージである」(109頁)。「ディアコニアは決して無言で

はない。ディアコニアのわががなされるどころ、そこではなにごとかが語られている」(同)。このことが理解されずに、「牧師とディーコンとの間に、次第にライバル関係が起こってきた」(90頁)。

ディアコニアが教会の職務から切り離された結果、ディーコン・ディーコネスの働きの場は施設になった。そしてディアコニア施設のパートナーは教会ではなく、「国と地方公共団体」となった。「ディアコニアの働きの場として設立されたある病院の院長は、行政関連の福祉担当者とは定期的に接触をもっていたが、その職責にあった間に一度も教会のトップと会ったことがないと思われる」ということになる(75頁)。著者はこのような事態が必ずしも望ましくないものだとは考えない。しかし社会福祉は教会との関係を持たず、行政と関係するだけになっても良いとも考えていない。「ディアコニア施設にとって、なんらかの形で教会の機構とのより深い連係を考えるべきときではなからうか」と言う(77頁)。

これは日本の社会福祉施設にも見られる現象であり、そこから日本のキリスト教社会福祉の危機も生じてきているのではないか。ノルウェーでは行政側が「ディアコニアがこれまでノルウェーの保健行政の歴史の中で果たしてきた役割」および、それが「将来に向けて堅固な価値体系を守っていくための協力者である」と評価していると言う(76～77頁)。これは日本でも言えることではないか。しかしこれからはどうなのか。

ノルウェーにおいて、教会の社会福祉事業が行政側の期待に応じて行くためには、ノルウェーの教会が社会福祉を教会のうちに正しく位置付ける必要があると著者は考えている。そして同時に「ディアコニアは教会刷新の可能性をそ

の内に秘めている」と言う（135頁）。日本の教会はまだ社会的責任を負うだけの実力がいないのだから、先ず伝道（宣教）に専念し、実力を付けるべきだという議論が主流になっているのではないか。本書の著者はそう考えていない。日本の教会は「施設のディアコニア」（社会福祉施設や病院だけでなく「キリスト教学校」も含めて）に目を向けず、働き人を送り出す努力をしてきていない。高い理想を持った個々のキリスト者によって多くの「施設のディアコニア」が始められた。しかし現在そこで働くキリスト者の数が極端に少ない。「社会福祉」を「ディアコニア」として理解する視点が日本の教会に定着しなければならないのではないか。

本書は日本のキリスト教界において広く読まれるべきである。とくに教会や社会福祉施設、キリスト教学校の指導的責任を負っている人々の必読書であり、本書から多くの刺激を受けるべきであると思う。「日本キリスト教社会福祉学会」においても「キリスト教社会福祉の神学的基盤」を明らかにしようという努力が始められた。本書の出版はその意味でも時宜を得たものと言って良い。将来は、日本人神学者の手によってキリスト教社会福祉の理念が打ち出されなければならない。